

# 第4回地域教育中予ブロック集会報告書

これからの地域づくりを  
共にひろげよう！！

かかわりをチカラに つながりをカタチに

令和2年2月15日(土)13:00~16:30

於：松山市青少年センター

3階 大ホール

主催 地域教育実践ネットワークえひめ

協力 NPO 法人えひめ子どもチャレンジ支援機構

後援 愛媛県 愛媛県教育委員会 「えひめ教育の日」推進会議

愛媛県教育研究協議会

## 地域教育中予ブロック集会開催要領

- 1 趣 旨 中予管内において子どもを取り巻く課題解決、地域の教育力の向上、あるいは地域課題の解決等に向けて日々奮闘している人たちが、「かかわりをチカラに、つながりをカタチに」を合言葉として元気を分かち合い、新たな展望を抱ける場を設ける。特に、次代を担う新・旧若者たちが自発的・積極的に人・もの・こととつながりながら、地域づくりを共にひろげていく取組の活性化を図る。
- 2 日 時 令和2年2月15日(土) 13:00～16:30
- 3 場 所 松山市青少年センター(3階大ホール) 松山市築山町12-33
- 4 主 催 地域教育実践ネットワークえひめ
- 5 協 力 NPO 法人えひめ子どもチャレンジ支援機構
- 6 後 援 愛媛県 愛媛県教育委員会 「えひめ教育の日」推進会議  
愛媛県教育研究協議会
- 7 テーマ 新・旧若者よあつまれ！  
これからの地域づくりを共にひろげよう！！

## 8 内 容

12:30 13:00 13:10 14:25 14:35 16:20 16:30

受付	開会行事	実践発表及び 発表者へのインタビュー	休憩	ワークショップ ～若者による実践発表を通して みんなで語り合おう～	閉会行事
----	------	-----------------------	----	-----------------------------------------	------

- 開会挨拶 地域教育中予ブロック集会実行委員会委員長
- 実践発表
  - 松山大学松本ゼミナール「iProject！」
  - 松山東雲女子大学しのモン応援隊『ボランティア』の出会いとその後
  - 愛媛大学児童文化研究会「いっしょにあそんでいっしょにたのしもう」
- ワークショップ ～若者による実践発表を通してみんなで語り合おう～  
<ファシリテーター(聞き手)>  
まちづくり学校双海人 教頭 富田 敏 氏
- 閉会挨拶 地域教育中予ブロック集会実行委員会副委員長

9 資料代 500円 学生は無料

10 参加申込み 締切：R2.1.30(木)

参加希望者は、所属・氏名・連絡先(電話番号・E-mail)・交流会希望・ボランティアを明記して、下記アドレスにメール送信するか、チラシ裏面の様式にてFAXで申し込む。

<申込みアドレス> yamaguchi-sadanobu@pref.ehime.lg.jp

<問合せ先> 地域教育中予ブロック集会実行委員会事務局 担当：山口 定伸

Tel：(089) 909-8780 Fax：(089) 941-6873

## 開会挨拶

地域教育中予ブロック集会実行委員会委員長

眞鍋 幸一

この大会では、これまで3回「かかわりをチカラに、つながりをカタチに」を合言葉に、大学生の実践をネタに、地域づくりや地域教育に関わる新・旧若者たちが、互いの交流を深め、地域の教育力を高め合う集会を開催してきた。第4回を迎える今回も、新・旧若者が互いの経験や知恵、アイデアを出し合いながら、新たな展望をもち、元気を分かち合える集会を企画した。また、今回参加した高校生が、ボランティアとしても活躍してくれた。

今回の実践発表では、まず松山大学松本ゼミナール、次に松山東雲女子大学「しのもん応援隊」、そして愛媛大学児童文化研究会が活動を発表する。ファシリテーターは、まちづくり双海人 教頭 富田 敏さん。今回も歓迎アトラクションはない。実りある元気の出る話合い時間を多く取ろうと思い、ワークショップの時間をまたまた増やした。お土産の目玉はインタビューダイアログとワークショップである。皆様と共に、広く、深く考え、元気の出る楽しい会にしたい。

さて一昨年は「こそ丸」の話をした。仲間がおればこそこの「こそ」。成分は愛情、謙虚、感謝、元気。昨年は、「未来なんか考える前に、今を真剣に生きなさい。そしたら未来はできる。未来のことで今の悪口ばかり言うと未来そのものがなくなる。与えられた命の時間を精一杯、力を発揮してほしい。その先には必ず自分の命はつながっているはず。」との話をした。今回は、参加されている皆さんの話である。何をするにしても、子どもたちに自分で生き抜く力や共に生きる力が身に付くように体験を積まさなければならない。そのためには、あのような大人になりたいと子どもたちから思われる人にならなければならない。大学生、高校生がたくさん来ており、年齢が違えば価値観も違う。心を開いてお互いの価値観をざっくばらんに語り合い、相互理解を深めてほしい。誰かと出会い、関わることで奇跡が起こる。様々な関わりが生まれ、新しい何かが起こることを期待している。

「折り合い」という言葉がある。これは「妥協」とは違う。特別支援教育の先生によると「お互いの意見を尊重し、それぞれが納得のいく解決策を見つける」ことだそうである。この会も折り合いをつけていただきたい。人間は他の動物と同じように次世代のために生きている。人間は次世代にバトンを渡しながら生きてきた。教え育むことが私たちの責務である。地域、先祖の歴史、伝統、文化を伝え、そして習わなくてはならない。

この会は皆様の心をリフレッシュする会でもある。こんなことを言ったら笑われるとか思わず、今の気持ちを率直に笑顔で話していただければよいと思う。そして、より多くの方々と知り合い、対話し、相互理解、共に活動する喜びなどにつながっていければよいと考えている。

この会が参加された皆様にとって有意義な会となるよう祈念申し上げて、開会の挨拶とさせていただきます。

## 実践発表①

【実践発表①「iProject！」の概要】

# 社会人基礎力育成事業 iProject!

松山大学

窪田萌加・白石百々愛・白石百合愛・濱田果歩

《iProject!》

伊予市・松山大学・伊予農業高等学校が連携し、市内の事業者や団体を巻き込みながら推進する共働事業。特産品の開発・販促等を通じて地域活性化を目的とすると共に高校生・大学生の社会人基礎力の向上も期待されている。

### 1 今年度の目標

☆伊予市の特産品を使ったランチバイキングメニューの開発

### 2 班編成と年間スケジュール

### 3 活動内容

(1) 各種班活動詳細と提案までの過程

- ・会合
- ・市場調査
- ・試食会
- ・提案及び成果発表会



【提案・成果発表会の様子】

### 4 活動の成果

- (1) 提供商品の採用
- (2) 参考資料等



【揚げナスのカツオ香味だれ】



【ちゃきこみご飯】

【実践発表①「iProject！」の発表内容】

「iProject！」とは、伊予市、松山大学、伊予農業高等学校が連携し、市内の事業者や団体を巻き込みながら推進する共働事業である。特産品の開発・促進販売等を通じて地域活性化を目的とすると共に、高校生・大学生の社会人基礎力の向上を目指している。今年度は、ウェルピア伊予で提供される「伊予市の特産品」を使ったランチバイキングメニューの開発をした。マーケティングやミーティングでは、高校生ならではのアイデアなども出されていた。

今回は、「ちりめんいりこ」「かつお節」「乾し椎茸」「びわ葉茶」「みかん・キウイ」という伊予市の特産品のメニュー開発に取り組んだ。あまり知られていないかもしれないが、伊予市は「唐川びわ」の生産地であり、その葉を使ったお茶も注目を集めている。大学生と高校生は特産品別の5班に分かれ、年間スケジュール（資料提示）でプロジェクトを進めた。

活動内容としては、月に1回会合を開き、情報共有や意見交換を行った。5月にはアンケートの内容を決めて実施し、6月にアンケート結果の分析を行い、それに基づいたメニューの決定、改良をした。

6月に行った市場調査は、アンケート用紙の記入だけではなく直接お話をうかがい、新たなニーズをとらえた。見知らぬ人に話しかけて意見をうかがうのはとても緊張したが、優しい反応が多く、うれしかった。多くの方の協力を得ることができ、752人の方から回答をいただいた。

アンケート結果をふまえたメニューの試食会を7月に行った。そこで出た感想や意見をふまえてメニューを改良し、10月には第2回目の試食会を行った。メニューのキャッチコピーなども考えた。例えば、ちりめんいりこを使ったメニューでは「ちりめん」と「チヂミ」を合わせて「ちりみ」というメニュー名にし、「伊予との距離がちぢみです」というキャッチコピーを考えた。

5班それぞれが考えたメニューは、ウエルピア伊予の皆さんへ提案した。緊張の中、高校生がメニューの工夫点を、また、大学生がキャッチコピーを説明した。主婦や企業の方々に試食をしてもらい、講評をいただいた。メニュー化されたのは、かつお節班の「揚げナスのカツオ香味だれ」、びわ葉茶班の「ちゃきこみご飯」。ちゃきこみご飯は、びわ葉茶の「熱すると赤くなる」という特色を生かして、インスタ映えする。毎月メニューが変わるランチバイキングには、無料入浴券がついていてお得なので、ぜひウエルピア伊予に足を運んでメニューを召し上がって欲しい。

## 実践発表②

【実践発表②「『ボランティア』の出会いとその後」の概要】

### 「ボランティア」の出会いとその後

松山東雲女子大学子ども専攻2年 石丸優羽

(被災地支援団体・しのモン応援隊)

#### 1 「ヤングボランティアセンター（ヤンボラ）」から始まったボランティア活動

- (1) 「ヤンボラ」とは
- (2) はじめの一步が出にくくて・・・

## 2 「ヤンボラ」での活動

- (1) 新しい体験（甲冑着付け、献血呼びかけ、愛媛F C柑太パーク 等）
- (2) 新しい人間関係（「また次の活動で！」）
- (3) 活動を通して感じたこと（「何ができるか」よりも、まずは参加しよう！）

## 3 高校卒業にあたって

## 4 大学での出会い

- (1) 「やってみたい」気持ちと「声をかけてくれた人」の存在
- (2) 「しのモン応援隊」への参加

## 5 しのモン応援隊の被災地支援活動

- (1) 西日本豪雨災害被災地での活動
- (2) 新しい体験・新しい人間関係

## 6 「ボランティア活動」がある大学生活

- (1) 「枠」を超えた人との関わり
- (2) ゆるやかなつながり

## 7 これから

「気持ちはあるんだけど一歩が出ない」人へ

### 【実践発表②「『ボランティア』の出会いとその後」の発表内容】

私のボランティア活動の始まりとなった「ヤングボランティアセンター」での活動について紹介したい。ヤングボランティアセンターは、愛媛県教育委員会が設置し、年間約200名の高校生が登録している。担当の先生からのアドバイスもあり、高校生が企画する活動もある。

当時、ボランティアに興味をもちつつも、実際には行動に移すことができなかった。しかし、高校3年生の1学期に「ヤングボランティアセンター」のチラシを見ながら「ボランティアをしたい」と友達に話したところ、一緒に参加してくれることになった。

まず、松山城の天守閣で観光客に甲冑を着付けるボランティアに参加した。知らない他校の高校生と協力して着付けを行うため難しさを感じたが、お互い少しずつ慣れてくるとコミュニケーションが取れるようになり、上手く役割分担できるようになった。その日に参加していた他校、他学年の生徒と仲良くなり、次の日も一緒に参加した。そこでの仲間と一緒に活動することが楽しみになり、献血の呼びかけ、サッカーの試合会場での子どもたちと遊ぶボランティアにも参加した。

ヤンボラでの活動を通して、「何ができるか、できないか」を考えるより「まず参加してみる」ということが大切だと思うようになった。できるかどうかを考えることも大事

だが、まずは「やってみよう」と一歩踏み出してみると案外楽しく活動できることを知り、「自分にできることはやってみよう」と思えるようになった。できないことがあるのは当たり前で、自分にできることを探して頑張ってみることも大切だと気付いた。

高校時代の経験から、大学に入ってもボランティアをしたいという思いがあった。その頃、チャペルアワーの司式をしたことから、先生や先輩から「しのモン応援隊」で被災地支援ボランティア活動に参加してみないかと声を掛けてもらった。この団体は、2016年の熊本地震をきっかけに活動を始めた被災地支援団体である。地震直後に熊本へ現地訪問をしたり、チャリティバザーを行ったり、学内で防災学習会を開いたりしてきた。

私がしのモン応援隊に入ってから少しして、西日本豪雨災害が発生した。現地調査を行った先輩から「空き地や公園は災害ごみや自衛隊車両、給水車で埋まっていた」「立ち寄った児童館は浸水して閉館していた」「町のどこにも子どもたちの姿はなかった」との報告があり、「子どもたちはどう過ごしているんだろう」と心配になった。そこで、「子どもたちに遊びを取り戻そう」という活動方針を決めた。その後、国立大洲青少年交流の家での水鉄砲遊びやお絵描ケア、運動遊びのお手伝いをした。材料代や交通費は、チャリティバザーや募金で調達した。活動を続けていると、災害直後と半年、一年後で子どもたちの遊びに変化が見られた。荒々しい遊び方からルールを守って楽しめるようになり、絵も徐々に穏やかな色づかいになっていった。西予市や宇和島でも活動した。宇和島の親子イベントでは、遊びコーナーを担当した。宇和島では保護者の方から「久しぶりにゆっくりできた」と喜ばれた。

今年度は「被災地の現状や他の団体の活動を知ろう」と、宇和島を訪問し、みかん農家の方や配食ボランティアを行った方からお話を伺った。日頃からのつながりが大切であることを改めて感じた。その後、私たちなりの支援の方法として、みかんジュースの飲み比べイベントを行い、被災地に関心を向け、身近な地域を支える大切さを訴えた。

私にとってしのモン応援隊という居場所は、普段関わることのない他学科専攻の社会人学生の方と関わることにより、新たな視野を広げ、自分を豊かにするとともに安心できる場でもある。人とのつながりを通して、様々な人の価値観に触れ、多くの経験をさせていただくことができた。また、しのモン応援隊には、「できるときにできる人ができることを」というモットーがあり、無理なく続けられる緩やかなつながりがある。自分らしく活動をすることができ、人と場所に恵まれていると感じている。

これまで様々な方々の支えによって「ボランティアをしたい」という思いを形にすることができた。そのため、今後は以前の私のような「ボランティアに興味はあるけれど不安がある人」に、活動してみたいと思えるように声を掛けてみたり、初めの一歩が踏み出せる「きっかけ」を作ったりしたい。また、活動を見て「やってみたい」と思ってもらえるような団体になりたいと思う。

## 実践発表③

【実践発表③「いっしょにあそんでいっしょにたのしもう」の概要】

### ～いっしょにあそんでいっしょにたのしもう～

愛媛大学児童文化研究会

岡本和真 安延大夢

#### 1 愛媛大学児童文化研究会の説明

- (1) サークル全員で活動する「サマースクール」・「ウィンターキャンプ」
  - ア 概要紹介
  - イ 具体的な活動紹介
- (2) 3つの部門に分かれて行う各依頼先での活動
  - ア 「地域」の活動の特徴
  - イ 「文化」の活動の特徴
  - ウ 「文学」の活動の特徴

#### 2 愛媛大学児童文化研究会の取組

- (1) ビデオを通して活動のようすを見てもらう

#### 3 最後に（まとめ）

【実践発表③「いっしょにあそんでいっしょにたのしもう」の発表内容】

児童文化研究会は教育学部のサークルで、1回生から4回生まで45人前後で活動している。地域の子どもたちに紙芝居や人形劇を披露したり、ゲームや工作をして遊んだりしている。とにかく子どもたちが好きなメンバーが集まっている。子どもたちとたくさん遊んで、子どもたちには様々な体験をしてもらい、学生も教師を目指す上での経験となっている。

活動は全体活動と部門活動がある。全体活動にはサマースクールがあり、夏休みに小規模の小学校を使用してキャンプを行う。大学生が遊びや料理などを企画し、運営する。昨年度は八幡浜市の喜須来小学校を使わせてもらった。サマースクールでは5つの班に分かれて活動する。「式」班は、当日の予定を立てたり、子どもの健康管理を行ったりする。「オリエンテーリング」班は、まず世界観を作り、それを基に構成されたゲームをク



リアしていくというものである。例えば「生物学者の見習い」という設定で、ゲームを用意する。「わくわく」班は、運動会の企画をする。フラフープを使った競技やデカパンを使った競技など、「学校では行わない」ユニークなオリジナルの競技を考えている。「飯盒」班は、家庭科室での調理や食事、後片付けなど、食事全般をスムーズに進められるようにする。子どもたちの中には、お米を研いだことがなかったり、包丁を使ったことがなかったりする子もいて、良い経験になっていると思う。「キャンプファイヤー」班は、考えた世界観を基に劇を行うなどする。例えば「干支の動物」をストーリーにして、その過程で子どもたちと一緒に歌ったり踊ったりして楽しむ。ウィンターキャンプは、夏のサマースクールの冬バージョン。乾燥によって火の扱いが危険になるので、飯盒がなかったりキャンプファイヤーがキャンドルサービスに変わったりする。

次に、部門活動は、サークル内で「地域」「文化」「文学」の3つの部門に分かれて行う。各部門が様々な依頼先に訪問し、活動を行う。湯築児童クラブや、昨年この中予ブロック集会に参加してつながりができたさくら児童クラブなどにも訪問させていただいている。「地域」グループは、主に外での活動を行い、公園等でアクティブに遊んだり、工作や道後散策をしたりして子どもたちと交流している。クリスマス会でコスプレをして、子どもたちにプレゼントをしている。「文化」グループは、自作の人形劇を行い、子どもたちと交流する。人形劇は脚本も作る。「巡回」といって、年に1回、遠方を回る。今年は西予市にうかがったが、西予市では「大学生」という存在が新鮮らしく、とても喜んでもらった。横幕や背景も自分たちで作っている。黒子の衣装を着て、本格的に演じている。「文学」グループは、読み聞かせや自作の紙芝居で子どもたちと交流を図っている。紙芝居や絵本などの文学的な作品を扱うことで、子どもたちがいろいろな話に触れたり考えたりする体験をしてほしいと考えている。依頼元によって、対象になる子どもたちの年齢が違うため、その年齢に合わせた作品を選んでいる。

最後に活動の様子を紹介したい(動画)。映像でも分かるように、教育学部のサークルなので、みんな子どもが大好きである。子どもたちと、とにかく楽しく交流している。みんな本当に良い笑顔をしてきている。冬のキャンプのキャンドルサービスでは、「わあ、きれい！」という自然な声上がり、「やって良かった！」と思った。サマーキャンプでは、Tシャツをみんなで作り、最後に記念撮影をした。わくわく運動会ではそれぞれのグループに大学生が入る。キャンプの最終日には涙の別れになるぐらい、子どもたちにも大学生にも感動する活動となっている。

## 発表者へのインタビュー・質疑

【発表者へのインタビュー】 聞き手：富田敏さん（まちづくり学校双海人 教頭）

富田：「しずむ夕日がたちどまるまち」双海町からやってきた。それぞれの発表について質問させていただく。まず「i Project!」の「i」は、何の意味？伊予市の「i」？

学生：先生、説明を。

ゼミ教員：地域に求められるいいプロジェクトに、という意味など、いろいろな意味が込められている。

富田：5つのグループのメニューが最終的に2つに絞られたということだったが、後で食レポ風に紹介してもらいたい。メニューのネーミングがよい。キャッチコピーの「伊予との距離がちぢみます」もとてもよい。それなのに選ばれなかった理由は。

学生：いろいろな具材を入れていくうちに厚くなり、チヂミらしさがなくなってしまった。ちりめんいりこの良さが生かされていなかったことが理由だった。

富田：市場調査を行ったとのことだったが、直接話を聞いていく中で印象的な会話などは？

学生：毎週のように通っているリピーターの方がいて驚いた。

富田：メニュー開発する上で参考になった意見は？

学生：「歯応えのあるものが良い」とか「つまみやすいサイズのものが良い」という声が参考になった。

富田：このプロジェクトのねらいである「社会人基礎力」が高まった実感は？

学生①：幅広い世代と関わる経験から、初対面の人とすぐに仲良く話ができるようになった。今日の会場でも生かされている。

学生②：以前は自分の意見を出すのが苦手だった。でも、協力して良いものを作るために、自分の意見が言えるようになった。

学生③：リーダーは「上に立つ」イメージだったが、自分で経験してみて、グループワークの時にみんなの意見を納得できる答にまとめていく役割なのだと感じるようになった。

学生④：とてもあがり症で今も手が震えている。でも企業への提案などの社会人のような経験をして、場慣れしたと思う。

富田：では、しのモン応援隊の学生さんに。高校生の時、ヤンボラに参加するまでは？

学生：高校の近くの保育園を訪問する活動には参加したことがあった。通っていた高校は家庭科の先生の紹介で保育園に行ったり、近くの高齢者施設などの壁面装飾などを行っ

たりするボランティア活動があった。

富田：西日本豪雨災害の時は、災害発生後どれぐらいの時期に被災地入りを？

学生：現地調査の先輩たちは発生後5日目ぐらいだったと思う。わたしは少し落ち着いて夏休みの時期になってから。

富田：難しい質問かもしれないが、今もし誰か新しいメンバーを誘うとしたら、どんなふうに？

学生：今、実際に「ボランティアをしてみたい」という思いがある学生がいて、「でも、どこで何を始めたらいいかを分かっていない」という状態らしい。そういう気持ちや意思があるところに、声をかけていきたい。

富田：では、児童文化研究会のお二人に。スライドショーで、活動の様子がよく分かった。発表にもあったが、「今どきの子はこんなことも知らない!？」と思うようなことは？

学生：例えば、調理中に何か床にこぼれた時、通常、拭く方向をそろえて雑巾で拭くものだと思うのだが、ぐじゃぐじゃと拭いてしまう。「教えてもらってないのかな？」と思った。

富田：自分たちが子どもの頃、同じような経験は？

学生：学校などで林間学校などはあったが、「大学生が」というものはなかった。

富田：皆さんの活動と「学校で」とか「公民館で」行うものとの違いは？

学生：学校では集団活動や時間の決まりが厳しい。自分たちの活動では、基本的なルールは決めるが、楽しく過ごしてもらうことを大切にしている。みんなでわいわいやって、子どもたちとの距離が近いことが違いだと思う。

富田：いろいろなサークルがある中、なぜこのサークルを選んだの？

学生①：将来は教員になりたい。子どもが好きで、子どもに関わりたと思ったから。

学生②：もともとは別のサークルに入ろうと思っていた。たまたま出席番号が前後の友人が見学に行くのに誘われて行き、話を聴いてみたらおもしろそうだったので入ることにした。

富田：これまでの活動での失敗体験などは？

学生：全員で作りに上げていくので、意見の違いが生じる。上手に折り合いをつけられず亀裂が入ったりしたこともあった。折り合いをつけることの必要性を学んだ。

## アイスブレイク

○ 進行：児童文化研究会

1 グループ7～8人でみんなが向かい合って座る。

### 【アイスブレイク】

①「名前しりとり」をする。

- ・なるべく知らない人と6～8人ぐらいのグループを作る。
- ・順番を決めて一番最初の方は名前を言う
- ・2番目の人は1番目の人の名前の頭文字から自己紹介を始める。  
(例、1番目 田中太郎→運動が好きな鈴木花子)
- ・3番目も同様に2番目の頭文字から自己紹介をする。
- ・1番目の人に戻るまで繰り返す。
- ・1番目の人はこれまでの自己紹介を全て言う。(例、田中太郎→運動が好きな鈴木花子→…→田中太郎)

②「文字作りゲーム」

- ・50音表を使ってお題に沿った単語をできるだけ多く作るゲーム
- ・お題1つにつき、1度しか文字は使えない。(例、お題:野菜 ×トマト)
- ・制限時間内に多くの単語を作れたチームの勝ち

## ワークショップ(小グループでの協議)

【ワークショップ】～若者による実践発表を通してみんなで語り合おう～

異年齢・異所属の6名～8名グループで、発表に関する感想や自分の活動紹介、悩みや展望などを自由に語り合う。

【ワークショップ】

司会：まず、グループの中で「自分の地域の好きな人・もの・こと」を一人1分以内で話しながら自己紹介を。進行役、記録係を決めてから進めてほしい。

## ～各グループで自己紹介～

司会:次に、自分に取り組んでいる活動のアピールや悩み、大学生の発表を聴いての感想、これから新たに取り組んでみたいこと、夢などを発表し合う。

### 【各グループでの話合いの内容】

- ・ 組織としてのまとめ、人とのコミュニケーションが共通した悩みであった。悩みを抱えることは悪いことではない。自分に合ったやり方、距離感でよい。
- ・ 人を見習いながら、自分に合う、自分がよいと思うものを見つける。
- ・ 話し合うことが大切であり、信頼を生むことで本音を話せる。
- ・ 海外ボランティアや行ったことのない場所でのボランティアにも参加してみたい。
- ・ 活動の様子を聞くこのような会に今後も参加したい。
- ・ 企画、発信していく活動を探していきたい。
- ・ 大人が集まって何かをみんなで作る、人と関わっていくのは面白い。
- ・ 行政に頼りきりでなく、こうしたいと発信していくことが必要。
- ・ 人の魅力を発信し、あの地域にあの人がいるから会いに行こうとなればよい。
- ・ 前向きな方はよいが、否定的な方をどう説得するかが難しい。
- ・ これまでどおりではなく、これまでより一歩踏み出すことが大切である。
- ・ 大学生が何を求められているか知りたい。
- ・ ボランティア部のある高校と大学がコラボするのもよいのではないか。
- ・ 子どもたちの心のケアをできる大学生の活動は大変大切である。
- ・ 活動の「横」が広がれば、もっとできることも増える。
- ・ 小・中・高の連携は学校行事ででき始めているところもある。次は、それ以外のつながりや大学生との連携が大切となる。
- ・ 根本的な「地域を盛り上げる」はまだまだだが、夢や希望をもってほしい。
- ・ 高校生、大学生が地域から抜け落ちており、こういう会に参加してくれていることがうれしい。
- ・ このような会に参加し、いろいろなアイデアを学校にもち帰るとよい。
- ・ 活動を広げるには、待っていても来ない。管理などを理由に断られることもあるが、アピールポイントをもち、それを訴えることが必要。
- ・ ボランティアをしていくために、コミュニケーションの力を身に付けたい。
- ・ 安全面、管理面、責任の所在を心配することがあるが、学生は愛護班等に協力して入り込んでいくとよい。
- ・ ボランティアとしてかかわる場合、マナー向上もかねて挨拶、マイはし等ルールをつくとよい。

## 全体での共有 協議内容をみんなで語り合おう

～グループ協議～

司会：各グループ1分程度で協議内容の紹介を。

グループ①：

今日の会を踏まえての夢を語り合った。ある方は「海外でボランティア活動をして、それを日本に持ち帰ってみたい」と語ってくれた。高校生は、主体的な活動をしてみたいと話してくれた。

グループ②：

ボランティアについて、地域について話し合った。「大学生と高校生がコラボしてみてもいいのでは？」という意見や、「大学がボランティアのためのバスを出したら良いのではないか」という意見があった。

グループ③：

いろんな組織の人たちで構成されているグループで、思いを共有した。高校の地域ビジネス科の1000日実習で、明日、商店街でホットサンドを販売する。ぜひ買いに来て欲しい。

グループ④：

若者が活動していく上で、協力者を増やす、目的を精査するなどのアドバイスを旧若者からいただいた。話す中で、どんな活動をしていくかが明確になった。

グループ⑤：

自分に合う方法を見つけることや信頼を生み出すこと、円滑な話し合いができるようにすることの大切さを学んだ。キャンプネームの活用など、取り入れていきたい。

グループ⑥：

地域に関するイベントで高校生がとても頑張っていると知った。旧若者からのアドバイスとして、人と人との関わり・一対一の関係が大切だと教えてもらった。

グループ⑦：

主催者側として「ボランティアの若者を『利用している』ように思われていないか」という心配があったが、「楽しんでやっている」と答えてもらった。

グループ⑧：

ボランティアと地域連携について話した。児童文化研究会は、「行く場所が限られていく

と新しい遊びを考えるのが大変」と話したところ、テレビでやっている「逃走中」のようなゲームも面白いと提案してもらった。4-Rings は通学路の見守りなどをしているが、学生の人数が少ないということだった。「団体同士の連携も考えたら良いかもしれない」という意見が出た。

グループ⑨：

「地域づくりには若者の力が必要」という意見にまとまった。まずは誘いを断らず参加し、そこで楽しさややりがいを感じたら、やがて運営側に回り、何か人の役に立つ力がついていく。視野を広くもつことが大切。

グループ⑩：

きっかけが大事。興味がない人でもつながることを工夫する。例えば、ある小学校では校庭の芝生の管理が大変と聞いた。とても高価な芝刈り機があるらしく、LINE でグループを作り「やれる人〜？」と呼びかけ、「この日ならできる」というような募り方でもいいのではないかな。

グループ⑪：

地域のイベントで印象に残っているものを話し合ったら、特にないという人もいた。地域の子どもたちが、イベントに限らず、何か印象に残るものをもってくれたらいいと思う。

グループ⑫：

それぞれが対等な ONE TEAM になるといい。行政の手が届かないところでこそ、みんなの活動が大事になる。移住も、ぜひ！

グループ⑬：

地域、人との交流が大事。若者も小さなことから始めたり、何かに参加して情報交換をしたりしながら大きな活動になっていくという話になった。

グループ⑭：

地域との関わりについて話し合った。参加、継続できる仕組みや幅広い人間関係づくりが大事。地域の良さを発信する SNS などをもっと頑張りたい。

グループ⑮：

高校生は自分で考え活動している。大学生に協力して欲しいという意見があった。

富田：あつという間の時間だったのではないかな。初めてあった人と、こんなに話が弾んだ。様々な意見があり、世の中は多様であることを感じてもらえたのではないかな。

でも、この場にいる 130~140 人は、同じタイプ。外に出たらもっといろいろな人がいる。いろいろなタイプの人と関わることで、自分の人生も、相手の人生も豊かになる。どんどん多様な人と関わってもらいたい。

富田：ありがとうございました。

## 講 評

地域教育実践ネットワークえひめ代表 若松 進一

大洲青少年交流の家に数学者の秋山仁先生がいらっしゃった時に「人間は何歳まで成長するのか？」と質問したら、「概ね30歳まで」との答えだった。成長している若者と、もう成長しない旧若者と。

今日は「超」という文字が付く、今の日本を象徴する言葉を紹介したい。まず、「超高齢化社会」。人生100年時代をどう生きるかということ。次に、「超人口減少社会」。愛媛県の人口は今135万人いるが、やがて消滅する町や村が出てくる時代をどう生きるか。次に、「超情報化社会」。昔はパソコンなんてなかった。人工知能というものが生まれた社会をどう生きるか。最後に、「超自然災害社会」。大きな自然災害が発生している。もしかして新型コロナウイルスも自然災害の一つなのかもしれない。その世界でどう生きるか。

この中に、「自分は人のためになりたい」と思う人は？「幸せになりたい」と思う人は？自分が青年団長になった50年前にいただいた言葉がある。「若い時に蒔かなければならない種がある」というもの。種の一つ目は、「仲間」をたくさん作るということ。豊かな人間関係を築く必要がある。二つ目は「主張」するという。思っていることを人前で話す練習が必要。三つ目は「感動」するという。感動しない人からは感動しない。四つ目は「希望・夢」をもつということ。何がしたいのか、どう生きたいのか。五つ目は「学び」の種。人間は学ばなければならない。六つ目は「ふるさと」という種。ふるさとへの想い。

自分は75歳になった今も幸せで、人の役に立ちたいと思っている。ここにいる人たちは、幸せの種を蒔き、水をやり、太陽にあてていくのだと思う。周りの人のために、芽を伸ばしてほしい。

## 閉会挨拶

地域教育中予ブロック集会実行委員会副委員長 谷川 玲子

今日は高校生の方とお話できたことに感謝している。優しさとやる気を感じた。共に考え、ともに感じる時間を大切にしていきたいと思う。本日はありがとうございました。



# 参加者アンケート結果

## 1 参加者について

(1) **参加者数 125 名** (高校生 29 名、大学生 36 名、一般 60 名) アンケート回答数 104 名

(H30年度 121名 高校生 8名、大学生 40名、一般 73名)

(H29年度 97名 高校生 1名、大学生 34名、一般 62名)

(H28年度 99名 高校生 3名、大学生 35名、一般 61名)

(2) 参加者の居住地

市町	松山市	伊予市	東温市	久万高原町	松前町	砥部町	東予	南予
人数	64	16	1	1	5	5	5	7

(3) 参加者の年齢構成

年代	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
人数	42	29	5	14	9	3	2	0

(4) 参加者の職種

職種等	学生	教職員	行政関係者	公民館	NPO・地域づくり団体	その他	無記入
人数	63	20	13	4	4	0	0

(5) 参加のきっかけ (複数回答)

きっかけ	ホームページ	SNS・ブログ	チラシ	家族・友人・知人	サークル	研究室	発表者の紹介	主催者からの誘い	その他
人数	6	3	29	21	23	1	3	27	18

## 2 満足度 (興味や関心の度合い)

☆実践発表や協議は興味や関心のもてる内容であったか。

(1) 実践発表

項目	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	無回答
割合 (%)	75	22	2	0	5

(2) 全体協議

項目	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	無回答
割合 (%)	82	15	1	0	6

### 3 参加した理由（主なもの）

#### (1) 高校生

- プレゼンテーション、グループディスカッションについて学びたかったから。
- マーケティングに興味があるから。
- 松山大学を志望しており、プレゼンテーションを聞くことができると知ったから。
- 地域活性化に興味があったから。
- 先生から紹介されてすごく勉強になりそうだったから。
- 先生から教えていただき興味をもった。
- 自分の意見を他者に伝える力を育てる良い機会だと思ったから。
- 大学生の活動を聞いて、高校で活動していく中での参考にしたかったから。
- 学校の先生にチラシを見せていただき、地域おこしの有志の方々と話せることに強く惹かれたから。
- 新しい知識、考えを広めるため。
- ボランティアに参加するため。
- 行く前に、どんなことをするかの内容はあまり分からなかったが、行って損はないと思ったから。
- どのようなボランティアに参加しているのか知りたかったから。
- 学校からの案内があり、何かプラスになるものがあるかと思ったから。
- 友人に誘われたため。
- 自分は将来、教育の道に進みたいので、少しでも何か得ることができると良いと思ったから。

#### (2) 大学生

- 活動の発表の機会があることを聞き、前で話す経験として参加した。
- 実践発表での学生、先輩達のプレゼン力・発表力を学びたかったから。
- 人前で話す力を付けたかった。
- 学校の先生に紹介されておもしろそうだったから。
- 所属学校教員に誘われたから。
- 若者の地域への活動、連携に興味があったから。
- 実践活動を聞いて自分たちの活動に取り入れたいと考えているので、参加した。  
参加者との協議により、自分のサークルをアピールして、他の団体と関係をもつことができれば良いと考え参加した。
- 自分の大学以外ではどのような団体がどのような活動をしているか興味をもったから。
- 主催者の方にお誘い頂き、同じボランティア活動をしている方々とお互いの悩みなどをお話できればと思ったため。
- この集会で自分の活動で抱えている悩みを相談したり、情報収集したりするため。
- iproject の成果発表を行う。地域の方とお話をして何かを得ることができると思ったから。

- 自分は地域活性化に興味があり、ディスカッションをして、活性化をするためにどんなことを行っているのかを知りたかったから。また、発表の仕方を参考にしなかったため。
- 自大学でもボランティアセンターがあり、ボランティアの在り方を役員の人に伝える活動をしている。他の大学や学校以外の専門機関の方々がどのように地域の方々と関わっているか、どんなボランティアセンターの形なのか知りたかったため。
- サークルでまとまって参加したが、地域のよさを広めていきたいという思いがあったため。
- 他の大学生と交流をもてるいい機会だと思ったから。
- サークルの活動の一環として。
- 例年参加しているため。
- サークルでの紹介と昨年参加したとき、楽しかったから。
- 自身の活動について広め、地域とのつながりを作ろうと考えた。
- 大学1回生の時から、参加をして、非常に勉強になっており、毎年参加している。今年も学ぶことがあると思い、参加した。
- 今後の自分たちの活動にプラスになると思ったから。
- 地域づくりをどうすればよいか考えてみたかったから。

### (3) 一般の方

- 地域教育は、今後の学校教育にもとても重要になるため。
- 知見を増やし、いろいろな人と出会い、いろいろな活動を知り、エネルギーをもらうため。
- 発表者の活動に関わっていたことがあったため。
- 自己啓発、地域貢献
- 自己開示、自己変革
- 主催者の方からお話をいただき、集会のテーマに興味を引かれたから
- 社会教育と学校教育とがいかにか手をとり合って、子どもの成長を支えていくか、知りたいと思い参加した。
- 公民館スタッフ（人材）の呼びかけのため。
- 若者の事例発表を通して、事業の参考にするため。
- 主催者の誘いを受けたから。
- 教育に関心をもっており、最前線で活動されている教育関係の団体とつながればと思い参加に至った。
- 職場で回覧されていたチラシを拝見して。
- 今年も新たな出会い（つながり）を求めて。
- 刺激やエネルギーをもらうために。
- 地域と若者のかかわり方を勉強したかった。
- 地域活動のヒントがあればと思い。
- 地域社会を支えるたくさんの人と話し合い、つながりをカタチにしたいと思い参加した。

- ・ ライフワークとして社会教育の関係者でありたいと考えているため。
- ・ ネットワークえひめ会員。
- ・ 毎年楽しみにしているから。
- ・ 新しい出会いを求めて。
- ・ 大学生の活動状況や思いを知りたかった。
- ・ 同じ思いをもっているみなさんの実践を知りたい。
- ・ 人生の1つの節目に、地域へ目を向けようとするため。
- ・ 実践報告、最新動向を知りたかった。
- ・ 様々な方からの実践や考えを聞けることが楽しい。自分の考え方を変えてくれる何かがあるのが面白い。
- ・ 普段接することのない方々と関わることができ、大変有意義だったから。
- ・ 新若者の頑張っている素晴らしい活動に興味があったため。

## 4 感想や意見

### (1) 高校生

- ・ たくさんの立場の方々とお話をし、自分がどれだけ地域に向き合えてなかったのか分かった。これを機にたくさんの活動をしたい。
- ・ 大学生のプレゼンテーションめあてで来たが、普段話し合うことのない年齢の方々や大学生、他校の同級生、実際に運営している側の方との交流で興味、関心が深まった。これからの自分の将来につなげたいと思い、とてもよい機会となった。
- ・ いろんな方とお話ができておもしろかった。また、来年も行きたい。
- ・ 今までの活動の中で気付けなかった、知らなかった大切なことに気付くことができた。心からこのイベントに参加できて良かった。
- ・ 先輩方の実際にやっている活動や、それに関する裏側の話も聞いてとても参考になった。班の方々もそれぞれが違った団体に所属していて、その立場ならではの話や、そこからつなげて自分の力にできるような話が聞けた。また、様々な団体・広い年齢層が集まると視点も経験も大きく違うので、本当に貴重な体験ができた。
- ・ 知らない人同士だったが、とても貴重な話を聞くことができた。また、参加したい。協議の時間は良いものだった。
- ・ 勉強になることばかりで、ワークショップでは、たくさんの年齢層からお話を聞くことができ、とても良い体験になった。
- ・ 様々な立場、職業から意見を聞いて良かった。立場は様々でも、悩んでいることは同じだと思った。そのため、解決策を考える話し合いにも積極的にできた。
- ・ 情報の交換や人との関わりなど、これから必要なものなので、もっと多くの人に参加するようになればと思う。
- ・ 全く異なる立場の人たちと中身の濃い時間を過ごすことができた。
- ・ このような場をもっと増やすべきだと思う。
- ・ 他班の人とも関わってみたい。
- ・ 様々な年代の方と協議できる機会はあまりないので、いろんな分野でどのような活動がなされているのか聞いてよかった。

- ・ 自分が意見を言うとしっかりと聞いてくれてとてもうれしかった。社会人の方などから、たくさんのアドバイスをもらうことができた。
- ・ 実践発表で、各大学のみなさんの活動を知ることができた。ヤングボランティア以外の活動は知らなかったなので、今日をきっかけに協力できることがあれば私も関わりたいと思った。
- ・ 今日、参加して人生の種をまいて花を咲かせることをしたいと思った。
- ・ 最初は先生にムリやり行かされた感があり、めんどくさかったけれど、終わってみれば参加できてよかったと先生に感謝している。また、来年もぜひ来たい。
- ・ 5~10分ほど開会時間を遅らせたほうが来やすい。
- ・ グループの人や他の人の意見を聞くことで、ためになるようなことも聞いたので、充実した会になった。また、参加したい。
- ・ 今まで自分に無かった考えや思いを大人の方から大学生の方々まで聞くことができてよかったな。

## (2) 大学生

- ・ それぞれの活動から、自分の活動や今後の就職に活かせる情報や考えを聞くことができて参考になった。
- ・ 今回、集会に参加し、自らの知見を広げるとても良い経験ができた。現職の先生方や社会教育課の職員の方や高校生、大学生の方たちと意見の交換ができてよかった。他の活動を知り、自らの活動にどう活かすか考えていきたい。
- ・ 旧若者の方々のお言葉が胸に刻み、活動に励んでいきたい。
- ・ 集会に参加して、初めての人達と話すことはとても緊張した。あがり症な私は人前で話すことがとても苦手だったが、思いを伝えることができ、たくさんのことを学べた。
- ・ 様々な所属の方と悩みや希望について語るができ、新鮮な学びとなった。
- ・ 大学生の貴重な意見を是非参考にしたい。
- ・ 様々な年齢、立場、所属の中で、できる限りの努力が感じられ、刺激になった。
- ・ 他の団体の実践発表を聞いて、自分が思いつかなかった活動を行ったり、自分たちと似ている部分を発見できたりするなど、多くのことを学んだ。印象に残ることが多く、自分たちの活動に取り入れる部分は取り入れたい。
- ・ 普段関わることのない高校生や学校の先生などいろいろな意見を交わすことができたので良かった。今後、様々なところで今回学んだことを活かしていきたい。
- ・ 多くの方々とお話しできて楽しかった。来年も是非参加したい。
- ・ 様々な活動を知り、自分たちの活動でも生かせることを生かしていきたい。
- ・ 社会人から高校生まで幅広い世代の方とお話をして、たくさんのアドバイスや意見をいただき、とても貴重な時間を過ごした。
- ・ この集会を通して、人間関係をうまく形成する難しさや、大人、子ども、学生、みんなの声が活動のベースになるということも学んだ。「行かせる」より「行きたい」と思うボランティアにしたいとこの集会全体を通して感じた。大学生3グループの発表から、「魅力」を伝えることの大切さを学ぶこともできた。

- この集会で学んだことを日々の生活やボランティアセンターの活動に生かしていきたい。One Team を大切に協力し、これからも活動していきたい。
- 世代や地域の違う人たちと多くつながりをもちたい。
- 雑談も含め楽しかった。
- 老若男女いろんな立場の人と議論できてよかった。特に「教育について」を教員、生徒、公民館の方などと話せて知見が広がった。
- 色々な人に知れ渡るような大々的な告知をするとよい。
- 新たな人との関わりができたので、参加して本当によかった。貴重な話をたくさんいただいた。
- とても勉強になった。この経験から、もっと色々な活動がんばりたいなと思えた。
- 幅広い年代の人と話をすることで、今まで気付かなかったことに気付き、視野を広げることができたと思う。
- 教育関係や公務員だけでなく、企業で勤める人の意見も聞いてみたいと感じた。
- 様々な立場の方と共有することはあまりしてこなかったため、とても興味深く話を聞くことができた。自分もこれから初心に戻って頑張ろうと思った。
- 毎年、様々な角度からの良い意見が聞け、有意義な時間だった。
- 初めはこの集会のことを何も知らず参加したが、参加してみている方々の話を聞き、いろいろと学ぶことができて、参加して良かった。
- 様々な世代の方々との交流のおかげで、日常生活では学ぶことのできないことを学ぶことができた。多くの人とのつながりの大切さを感じた。
- 参加して良かった。人の経験、やっていることなど意見を共有することが大事であり、会に参加するのは良いことだと分かった。
- 同じようなことをしている人が集まっていて、他の活動を知り共有できて良かった。班の大人の方からもどうしていったら良いか聞けたのでよかった。
- 様々な意見、感想を聞き、自分の学び、成長につながった。

### (3) 一般の方

- 若い方の参加が多く、驚いた。これからの地域教育を担う若者の関心度が高く、うれしく思う。わたしも負けぬように、地域教育に取り組んでいきたい。
- 若者の発表がどれもすばらしかった。
- 若い方と話ができていい刺激となった。
- 高校生が多く参加しておりビックリした。よくやったと思う。今後も続けて欲しい。
- 高校生が、昔の自分達よりさらに自主的に活動している姿を見て、自分達ももっと頑張ろうと思った。
- 大学生のサークルでやっていることやいろんなグループでやっている活動を今日のように宣伝し合ったり、共有できたりする場があると、活動の幅が広がったり、知らないことを知ったりすることができて良いと思った。
- 新旧の若者がつながるよい機会だった。会の趣旨は達成されていると思う。

- 交流のテーマ（話題）は、もう少ししぼったほうが（もしくは分ける）話しやすく、まとまりやすいと思う。
- 高校生、大学生、若者から元気をもらった。自分もこれからだと思って、次への活動・仕事をがんばりたい。都合がつけばまた来たい。
- 地域と学校が協働で行っている取組などがあれば聞きたい。
- 若い方々が様々な立場で活動されていて、大変勉強になった。発表者のプレゼン能力はすごく大切だと思った。いかに人に伝わるプレゼンをするのか、今後考えていきたい。
- ワールドカフェ方式などあらゆる人と関わる時間もほしいと思った。大学生中心であったと思うが、高校生の活動も確認できるとよい。
- 自分達と同世代、年上の人間の考え方を聞くととても良い機会だった。
- 学生さんを含め様々な所属、立場の方とお話ができ、とても参考になった。
- 高校生、大学生との交流は楽しい。是非、今後もこの流れを続けてほしい。
- 若者のエネルギーを感じた、一層、頑張らないといけないと思った。
- たくさんの人とつながり、明日からの生き方を考える一日になった。素晴らしい会を開いていただいた。
- 今回の実践発表は、活動報告がほとんどであったので、分析の部分など活動の意味付けが更に報告されると良いと考えた。
- 高校生を、このまま多くの人数の参加があるように維持してほしいと思う。
- 今年も高校生、大学生の若いパワーに元気をもらった。
- このようにたくさんの若者とふれあえることをうれしく思う。
- 期待どおりの集会であった。時に高校生、大学生と話し合える場である。
- 高校生、大学生の若者とともに、難しいところではあるが、20代の社会人をもっと巻き込めたらいいと思う。
- 後半、テーマがあるような、ないような。でも、とにかく人の思いを知るこの会に参加できてよかったと感じる。
- 社会教育って素晴らしいと思った。
- 教育は人なりということを改めて感じた。
- 様々な立場の方から、今行っていること、これからしたいことなど、たくさん話を聞いて、自分のやりたいことなどに対するたくさんの知識を得られた。
- 学生の取組だけでなく、社会人（旧若者）の今の取組などを紹介できたら学生にも様々な興味をもってもらえるのではないかなと思う。
- 実践発表について文字だけでなく写真や動画があって分かりやすかった。ワークショップの時間を増やしても良いのではと思いました。
- 様々な人と意見交換できてよかった。
- 次につながるようにしたい。発表者には必ずレジュメに団体の連絡先を入れてもらいたい。次はこんなことをしたいという発表も聞きたい。活動報告の中に未来への展望も入れてほしい。
- 高校生、大学生、若い世代の新鮮な考え、意見が聞いてよかった。若松さんの講評も含蓄があり、大変参考になった。学生にも授業時、要点を伝えていきたい。

- 高校生の参加も増え、大変フレッシュな会になり、たくさんパワーをもらった。
- 地域づくりへの関心の高さを実感することができた。
- 大学生だけでなく高校生の参加もあり、地域のために様々な活動をしていることが分かり、大変参考になった。
- 高校生の参加が多かったので、高校生の実践事例も取り上げて欲しい。
- 大学生たちの活動の様子、生の声が聞けてよかった。旧若者と若者の意見の交流もあり、楽しかった。若者の夢を語り合う時間が充実した。
- 第3回がよかったので、これ以上は難しいのではないかと考えていたが、大学生に加え高校生も参加して、素晴らしい集会になったと思う。若松代表からもよい話をいただいた。